

# 西南大学社会科学处

## 证 明

西南大学外国语学院副教授彭玉全发表在日语期刊《北研學刊》的学术论文《日中色彩範疇語の文法機能の類型論の考察》，期刊卷号第十一号，发表时间为 2015 年 2 月。

2024 年 9 月 21 日，经西南大学学术委员会学术评价专门委员会（人文社会科学工作组）组织校内外专家评议，参照《西南大学研究项目与成果分类分级办法（试行）》（西校〔2021〕74 号）、《中共西南大学委员会关于做好 2024 年度党建工作与事业发展融合考核工作的通知》（西委〔2024〕48 号）文件相关规定，此学术论文认定为 A1 级。

特此证明



ISSN 1349-4228

# 北研學刊

第十一号

廣島大學北京研究中心

2015年2月



## 目 次

中国各省区市高考英语写作命题评析	韩 梅 .....	1
外国人学生のための日本語日本文化研修の意義	本田義央 .....	8
詠梅詩に見られる菅茶山の漢詩の特徴	任 穎 .....	24
日语专业课程体系中会话课的定位	关 冰冰·杨 炳菁 .....	38
外语误用界定问题研究	史 兆红 .....	45
基于语料库的日语初级教材的比较 —以外来语导入情况为例—	关 承·王 双 .....	56
語彙的複合動詞「V かける」の統語構造 —語彙概念構造 (LCS) の観点から—	吕 芳 .....	64
日中色彩範疇語の文法機能の類型論的考察 —「赤」「白」語義の語彙を中心にして—	彭 玉全 .....	79
「V1 テ + V2」の否定文における否定のスコープ	張 玉玲 .....	93
「少し」による程度修飾と量修飾	陳 小英 .....	103
日本語教育文法の観点からみる中国人日本語学習者向けの文法指導 —「として」を例に—	謝 冬 .....	114
日本語の使役受動態に関する研究	丁 舒晟 .....	129
日中数量詞用法の違いと中国人日本語学習者の誤用 —存現文において—	滕 小春 .....	146
日本对“关东州”中国人开展实业教育的原因分析 —以“满洲国”建国为中心—	王 妮 .....	154



# 日中色彩範疇語の文法機能の類型論的考察\*

## —「赤」「白」語義の語彙を中心にして—

西南大学 彭 玉全

**要旨：**本稿では、色彩範疇語を研究対象として、日中語の「赤」「白」語義の語彙を例として、色彩範疇語の使用実態、色彩範疇語の位置移動、色彩範疇語とアスペクトとの関係、といった面から色彩範疇語の文法機能を言語類型論的特徴を捉えてみた。

**キーワード：**色彩範疇語    文法機能    言語類型論    「赤」「白」語義    日中語

### 0. はじめに

人類は、物事の状態あるいは人の感情、情緒、動作行為の様態などに対して感覚器官によって感知し、思惟加工などの智能過程を通して概念化して修飾限定関係を形成させる。修飾限定関係は言語に投影し、このような関係を表す文法構造——修飾限定構造を形成する。このような修飾限定構造は人間の脳に反射し、1つの認知語義範疇——情状範疇語を形成する。情状範疇語は物事の状態と人の情態の総計であると定義しておく。当該の範疇語は述語と関わるだけでなく、動作の主体と客体と、またアスペクト範疇<sup>1)</sup>、モダリティ範疇、程度範疇、量範疇などとも関係づけられている。言語研究においては、重要な語義範疇として情状範疇語を研究する価値があると思われる。

色彩範疇は情状範疇の下位範疇の一つであり、人類がヒト、モノなどの色彩に対して、視覚器官によって脳に反応し形成させる概念である。色彩範疇は言語によって表され、色彩範疇語<sup>2)</sup>を形成させる。このような語彙は文法的な分布が広く、動作主体のありかたとしても、動作客体のありかたとしても表されている。品詞からみれば、それは、名詞でもあり、形容詞でもあり、乃至動詞でも存している。その文法機能もより複雑であるので、学習者に習得困難がもたらされている。

### 1. 先行研究と本稿の目的

色彩範疇語について、これまで数多くの研究が蓄積されているが、名詞としての色彩語彙や色彩語、色名に関する研究が主である。が、いわゆる明度・色彩形容詞の研究は、久島茂(2001)しか挙げられない。

#### 1.1 先行研究

色彩語彙（または、色彩語、色名）についてさまざまな視点から考察されているものは



『日本語学』特集テーマ別ファイル (2) 意味Ⅱ』(1988 年 1 月号通巻 63 号) に掲載され、その特集においては、小林重順、佐藤喜代治、柴田武、三宅鴻などの学者より「色彩語観」、「色彩語感」、「色名の語彙システム」、「日本文学や漢文における色彩語」、「色彩語の語源」などについてより早く論述されている。このほかに、色彩語の語彙的意味の特徴について、李庆祥 (2002) は日本語の色名の語義特徴を捉えている。色彩語彙の文化的特徴について、李庆祥 (2003)、魏丽华 (2003)、董冰 (2005) と蘇紅 (2014) では、日中語の色彩語彙の文化的特徴が対照されている。色彩語彙とメタファーの関係について、矢野光治 (2002)、彭国躍 (2008)、陆娟 (2009) は認知言語学の立場で研究がなされている。また、色彩語彙の調査について、富永昌治 (1991) では、大学工学部の学生を対象として現代色彩語彙の調査が行われ、色名の頻度を統計的に評価し、基本的色名の重要度の順位は、調査年度の流行によって変動することがあると指摘されている。小野文路・堀内隆彦・富永昌治 (2010) では、現代日本人を対象として色彩語彙の調査が実施されている。

## 1.2 本稿の目的

1.1 節触れた研究はそれぞれ、語彙論の立場で色彩語彙の語彙的意味を、比較対照の立場で日中語色彩語彙の文化的特徴を、社会言語学の立場で色彩意識や色彩感を捉え、ほとんど名詞か形容詞に注目して研究がなされている。本稿では、色彩範疇語を研究対象として、言語類型論の立場で日漢言語の「赤」「白」語義の語彙<sup>3)</sup>を例として、色彩範疇語彙の文法機能を考察し、具体的に言えば、(1) 色彩範疇語の使用実態、(2) 色彩範疇語の位置移動、(3) 色彩範疇語とアスペクトとの関係、といったことを考察し、その言語類型論的特徴を捉えてみる。

## 1.3 本稿の資料

本稿の資料は、『中日対訳コーパス』(北京日本研究センター, 2002) を用い、それぞれ「赤」、「紅」、「白」、「紅」、「赤」、「白」といった漢字の正規表現<sup>4)</sup>で用例を検索し、「赤い」、「赤く」、「紅い」、「紅く」、「白い」、「白く」などの「赤」「白」語義に関する日本語原文用例と「紅」、「赤」、「白」などの「赤」「白」語義に関する中国語原文用例を収集する。コーパスから収集した用例数は、次の表 1 で示しておく。なお、用例を整理する際、「赤坂 (地名)<sup>5)</sup>」「赤の他人」の「赤」、「白根 (人の名字)」、「林紅 / (中国人の名前)」、「赤脚医生 / 裸足の医者」、「‘刚解放, 您就蒙了不白之冤哪’ / 解放直後から、あんたは怨みを抱いてきた。」など「赤」「白」色彩語義に関わっていないものを削除する。

表 1 コーパスから収集した「赤」「白」語義の用例数

	赤(赤)の例	紅(紅)の例	白(白)の例	延べ用例数
日本語	729	194	1260	2317
中国語	253	2382	3521	6156
延べ用例数	982	2576	4915	8473



ちなみに、表1から分かるように、全体的に言えば、前掲の対訳コーパスにおいては中国語の色彩範疇語の使用量は日本語のそれより多く、日中語の用例総数から見れば、「白」語義の使用量は「赤」語義の使用量がより多いと意味深く思われる。この点について、更なる考察が必要であるが、他の色彩語義の色彩範疇語の用例を調査しなければ、結論を下すのが危険なので、ここでは、ただ指摘することに留まっている。

## 2. 色彩範疇語の使用実態

日中語の色彩範疇語は、品詞については、形容詞、名詞、動詞などとして働き、文法機能については、述語、連体修飾語、連用修飾語、補語などとして文法機能を果たしている。この節では 色彩範疇語の品詞分布、文法機能の分布、修飾精密度から色彩範疇語の使用実態を考察する。

### 2.1 品詞の分布

日中語の色彩範疇語の品詞については、本稿の考察した資料の限りでは、中国語の“赤”“紅”“白”と日本語の「赤」「紅」「白」に関する語彙は、いずれも形容詞、名詞、動詞などに分布している。その品詞分布の実態は、表2で示す。

表2 日中語の色彩範疇語の品詞分布の実態（用例数）

	形容詞	名詞	動詞	形容詞的 形態素	動詞語素	成語	用例数
中国語 “赤”	16 (59.26%)	0	0	0	0	11 (40.74%)	27 (100%)
日本語 「赤」	249 (46.20%)	39 (7.24%)	10 (1.86%)	236 (43.78%)	5 (0.93%)	0	539 (100%)
中国語 “紅”	516 (36.57%)	21(1.49%)	267 (18.92%)	581 (41.8%)	0	26 (1.84%)	1411 (100%)
日本語 「紅」	53 (34.42%)	19 (12.34%)	0	76 (49.35%)	6 (3.90%)	0	154 (100%)
中国語 “白”	733 (52.10%)	18 (1.28%)	7 (0.50%)	641 (45.56%)	0	8 (0.57%)	1407 (100%)
日本語 「白」	474 (84.34%)	23 (4.09%)	0	61 (10.85%)	4 (0.71%)	0	562 (100%)

色彩範疇語においては、“赤红的大枣”、「赤い空」、「血紅的太阳」、「紅い花」、「雪白的野鸽子」、「白い雪」のように、独立に名詞を連体修飾することがある。それに対して、「赤肌、赤インク、赤土」、「紅鞋、紅辣椒、紅纸条」、「紅蒲団、紅葉」、「白馍、白粉、白云」、「白粉、



白煙、白雪」のように、形容詞的形態素として名詞を修飾し、名詞の語素となることもある。即ち、名詞の語素としての色彩範疇語は、連体修飾の働きを果たしている。表2から次のことがわかる。

一つ目には、これらの日中語の色彩範疇語は、形容詞的な働きをする割合（「形容詞」と「形容詞的形態素」との合わせ）それぞれ、59.26%、89.98%、77.75%、83.77%、97.65%、95.20%占めているので、いずれも主に形容詞として使われているという点に共通している。ここからみると、日本語にしろ、中国語にしろ、色彩範疇語は言語における重役は、連体修飾機能を果たしていると考えられる。

二つ目には、日中語の色彩範疇語は、中国語の“赤”を除いて、いずれも名詞とすることがある。現代中国語において、単音節の“赤”は、独立の語にならず、形態素にしかないといえる。現代中国語の口語では、“赤”は色彩範疇語としてあまり使われなくなり、化石化になっており、この場合はその代わりに“紅”が用いられるようになっていいると思われる。この点は、《古汉语常用字字典》（商務印書館（中国），2010年第6版，第49頁）によると、色の濃さには、古代では“赤”が“紅”より濃いと見られ、現代では、その差がなくなっていると説明されている。色の濃さの変化は、“赤”と“紅”の使用頻度に関係づけられていると思われる。表2で示されているように、“赤”と“紅”の用例総数は、それぞれ27例、1411例で、現代中国語においては、“赤”より“紅”のほうが使用頻度が低いと見られる。それに対して、日本語の「赤」と「紅」の延べ用例数は、それぞれ、539例、154例で、現代日本語においては「赤」は「紅」より使用頻度が高いと考えられる。

また、中国語の“紅”と“白”は、中国国内で出版した字典において、ほとんど動詞と見られていない。しかし、『超級クラウン中日辞典』（CASIO 電子辞書、E-A300 版）によると、“紅”の品詞の一つとして動詞とみられ、“红了脸 / 顔を赤らめる。”という例文が取り上げられ、「赤くする」と注釈されている。だが、同じ電子辞書においても“白”は動詞とみられていない。しかし、コーパスにおける用例からみれば、次の(1) - (6)にける“紅”と“白”は、動詞の用法であると思われる。

- (1) 英娥腾地红了脸，但立刻又现出怒气：“谁去！看他哩，看个鬼！” / 英娥はさっと顔を赤らめたが、すぐに怒りを顕にした。「誰が行くもんですか。とんでもないわ」（《插队的故事》）
- (2) 她相信幸福就在那个春天，在那个红了桃花，绿了原野，一行行大雁飞回故乡的时候… / その春、きっと彼女は幸せになるだろう。平原に緑が萌え、桃の花が開いて、雁の群れがふるさとを目指して飛んでくる春に……（《轮椅上的梦》）
- (3) 小两口恩恩爱爱，没红过脸，一年之后，给他生了个胖孙子。 / 夫婦仲も睦まじく、声を荒げるようなことはついぞなかった。（《金光大道》）
- (4) 道静红着脸喘着气，她提高了嗓音，气恼地喊道： / 道静は顔をまっかにして、息をはずませると、声をたかめて、怒ったようにいった。（《青春之歌》）
- (5) 能说得院儿里围听的老少爷们儿都白了脸儿。 / 聞いている連中を、老いも若きもまっさおにすることができた。（《轎轡把胡同9号》）



- (6) “前边, 那个前边可长着哪! 也许要折腾到你白了头发, 我白了胡子呀。” / 「先か、先は長いぞ。ひょっとしたらおまえが白髪で、こっちも鬚が白くなるまでつうことになるかも知んねえなあ」(《金光大道》)
- (7) 柑树橘树绿了山, 富了民, 乡里的人都说还是共产党好。 / ミカンの木は山を緑化し、人々に富をもたらしした。(《我的父亲邓小平》)

(1)における“脸”と、(2)における“桃花”は述語“红”の目的語である。(5)における“脸儿”と、(6)における“头发”、“胡子”は述語“白”の目的語である。(3)における“红过脸”と(4)における“红着脸”は、動詞の文法的特徴を具有している。ゆえに、“红”と“白”が動詞用法を持っていると考えられる。ちなみに、(2)における“绿”や(7)における“绿”も動詞用法であると見られる。品詞性からみれば、色彩範疇語は元々形容詞か名詞であると扱われているが、形容詞か名詞から動詞用法として使われている場合を色彩範疇語の動詞化と規定すれば、“红”、“白”、“绿”、“赤”、“黄”、“黑”などの色彩範疇語においては動詞化の差がある。“红+了+名詞”、“红+过+名詞”、“红+着+名詞”などのような動詞の基本的な構造をもっており、“红了脸”“红了眼圈”“红了眼”などの再帰用法もあれば、“红了桃花”のような非再帰用法もある。ただし、“红”は他の動詞に比較すれば、やはり動詞化の差があり、それは典型的な動詞ではなく、動詞化している中途半端のものである。ちなみに、“绿”は、具体的なモノ(例えば、(2)における“原野”、(7)における“山”)を目的語とする動詞用法であるが、“白”は、身体の部分をも目的語としてする再帰用法で、いずれもまだ典型的動詞ではない。それに対して、前掲の『中日対訳コーパス』による用例調査や辞書調査に従えば、色彩範疇語“赤”、“黄”、“黑”はいずれも動詞用法として使われない。従って、中国語の色彩範疇語の動詞化は次のような動詞化の程度の差があると思われる。

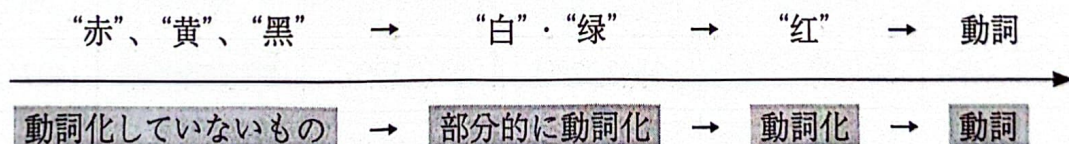


図1 中国語色彩範疇語の動詞化

それに対して、日本語の「赤」「白」が形態素として動詞を形成させるもの多い。次の(8)(9)(10)(11)を用いて検討してみる。

- (8) 「矢須子さん、これは相聞歌というのでしょうか」と家内が、年甲斐もなく顔を赤らめたのを重松は覚えている。…(後略)(『黒い雨』)
- (9) 葉子は窓をしめて、赤らんだ頬に両手をあてた。(『雪国』)
- (10) ドアの向うの一周り小さい部屋に新しい水槽が作られてい、それには白濁したアルコール溶液が満たされていた。(『死者の奢り』)



- (11) それから、八千代は曾根の顔が少し青白んできたのを見て、急いで言い直した。(『あした来る人』)

(8)における「赤らめる」、(9)における「赤らむ」、(10)における「白濁する」、(11)における「青白む」は、いずれも動詞である。このほかに、日本語においては「赤む」「白む」「黒む」「青む」といった色彩範疇語の動詞もある。ここからみれば、中国語の色彩範疇語は名詞や形容詞から動詞化しつつあるのに対して、日本語の色彩範疇語は、元来動詞の形態素として動詞を形成させ、動詞用法として使われものが推測できると思われる。これは言語変化の一つであろう。これは、日中言語の文法構成が異なっているからである。日本語の色彩範疇語は、形容詞「赤い」「白い」は「形容詞語幹＋く＋する」「形容詞語幹＋く＋なる」のように事態を表現できるが、中国語の色彩範疇語は、“红了＋N(名詞)”，“白了＋N(名詞)”のように、助詞をつけば出来事の発生・出現を表すことになるかと解釈できるだろう。だが、図1で示されたように、中国語色彩範疇語の全ては、このような文法的要素の構成によって動詞述語機能を果たすわけではないが、動詞化の程度差が存している。

## 2.2 文法機能の分布

2.1 で触れたように日中語の色彩範疇語の主な働きは形容詞用法であるので、この節では、主に形容詞用法の文法機能を考察してみる。

表3 色彩範疇語の形容詞用法の文法機能

	名詞を修飾	述語となる	動詞の 様態修飾	動詞の補語	形容詞用法の 延べ用例数
中国語“赤”	11(68.75%)	5(31.25%)	0	0	16(100%)
日本語「赤」	381(76.66%)	16(3.22%)	14(2.82%)	86(17.30%)	497(100%)
中国語“紅”	759(69.19%)	131(11.94%)	42(3.83%)	165(15.04%)	1097(100%)
日本語「紅」	100(75.52%)	1(0.78%)	5(3.88%)	23(17.83%)	129(100%)
中国語“白”	1099(79.99%)	193(14.05%)	13(0.95%)	69(5.02%)	1374(100%)
日本語「白」	429(80.19%)	35(6.54%)	20(3.74%)	51(9.53%)	535(100%)

表3から次のようなことが分かる。

まず、日中語の色彩範疇語の形容詞用法においては、名詞を修飾限定する割合はそれぞれ68.75%、76.66%、69.19%、75.52%、79.99%、80.19%である。ここからみれば、日中語の色彩範疇語の形容詞はその主な文法機能は、名詞を修飾することであるという点に共通している。

次に、日中語の色彩範疇語の形容詞用法は、中国語の“赤”を除いていえば述語として働くことが少ないという点に共通している。また、日中語の色彩範疇語の形容詞は、中国



語の“赤”を除いていえば、いずれも動詞の様態修飾や動詞の補語になりえる。この点については、後文でさらに検討する。

### 2.3 修飾の精密度

日中語の色彩範疇語は、いずれも名詞や動詞を修飾する。モノの色彩は多様であるが、言語によって同じ「赤」「白」であっても、その多様さを表現する語彙の多寡の差がある。これを修飾の精密度と呼ぶことにする。

表4 日中語の色彩範疇語「赤」「白」の語彙の多寡

中国語“赤”	赤红、赤褐色 (2個)
日本語「赤」	赤、赤い、真赤、真っ赤、赤黒い、薄赤い (6個)
中国語“紅”	红、鲜红、殷红、紫红、暗红、黑红、嫣红、艳红、大红、微红、深红、血红、通红、粉红、绯红、飞红、红彤彤、红通通、红艳艳、红扑扑、紫红色的、乌红色的、火红色的、暗红色的、酡红色的、赤红色的、酱红色的、粉红色的、浅红色的、红黑色的、桔红的、黝红的、红润、通红的、彤红的、茶红色的、半红的、焦红的 (38個)
日本語「紅」	紅い、紅、薄紅、真紅、淡紅、深紅、薄紅色、淡紅色 (8個)
中国語“白”	白、洁白、银白、青白、清白、雪白、花白、苍白、灰白、惨白、斑白、嫩白、淡白、苍白、煞白、黄白、莹白、润白、乳白、死白、白皙、白净、白嫩、白胖、白亮、白皑皑、白茫茫、白蒙蒙、白茸茸、白森森、白汪汪、白花、白亮亮、白生生、白光光、白白胖胖、白白净净、白白软软、粉白色的、银白色的、灰白色的、青白色的、银白色的、乳白色的、鱼白色的 (45個)
日本語「白」	白い、真っ白い、蒼白い、青白い、生白い、純白な、真白な、真っ白な (8個)

表4から分かるように、中国語の“紅”“白”の語彙は「赤」「白」の程度や種類などを細かに表現している。中国語の“紅”“白”の語彙は日本語「紅」「白」よりそれぞれ圧倒的に多い。中国人は日本人より色彩に対する視覚が繊細で、中国語においては色彩の多様性を表現する言葉が多く、日本語においては色彩の多様さを表す語彙が少ないと言えろう。この点については、杉浦明平(1976)では若葉の色の多様性を到底言葉では表現しきれない嘆きを述べられていることや、木原茂(1988)では「現実世界の色彩は無限に多様である。しかし、それを言葉で表現しようとする、言葉の数は少ない。少ない言葉で無限の多様性を表現することは到底不可能である。」と指摘されていることから窺えられる。日本語は色彩の多様性を表すために、色名に形容詞（例えば、「薄い」「濃い」「浅い」「深い」）や、程度副詞（例えば、「きわめて」「非常に」「かなり」）をつけたり、植物名と動物名（例えば、「桃色」「菖蒲色」「鴝色」「鶺鴒色」「ねずみ色」）を借用したりして表現手段が用いられている。中国語の色彩範疇語は、これらの表現手段のほかに、色彩名に光度を表す語をつけることや、



あるいは色彩語の重ねといった表現手段が使用されているが、表4から分かるように、中国語の“紅”“白”色彩範疇語は、日本語より修飾の精密度が高いと言える。

### 3. 色彩範疇語の位置移動

日中語の色彩範疇語は主語、目的語を連体修飾することもあるれば、述語動詞の様態を修飾することもある述語動詞の補語になることもある。日本語の修飾語は、文において連体修飾語から様態修飾語、または補語（つまり、動詞の結果補語で、いわゆる学校文法の「連用修飾語」の一部である）に位置移動できるという指摘があるが、中国語の色彩範疇語は、このように位置移動できるかどうかについて考察してみる。

#### 3.1 日本語の色彩範疇語の位置移動

日本語の色彩範疇語は、目的語の連体修飾語から述語動詞の補語に変わることができるか、ここでは用例を用いて考察してみる。

- (12) 食事は二時間程で終わった。曾根はちょうしを二本あけて、少し顔を赤くしていた。/ 訳：飯吃了两个来小时。曾根喝光了两瓶酒，脸颊微微发红了。（《あした来る人》）

→赤い顔をしていた (○)

- (13) その代り御嬢さんの方でも赤い顔をしました。/ 訳1：她也羞红了双颊。/ 訳2：那边也面孔绯红。（《あした来る人》）

→顔を赤くしました (○)

(12)における「赤く」は「していた」の補語になっているが、この文は(13)のように「赤い顔をしていた」に変わってもいい。逆に、(13)における「赤い」は「顔」の連体修飾語であるが、それを「顔を赤くしました」に変わっても差し支えない。つまり、連体修飾語から述語動詞の補語に位置移動できる。

また、次の(14)における「赤黒く」、(15)における「紅く」、(16)における「白く」は、いずれも述語動詞を修飾しているが、これらはそれぞれ「赤黒い血」、「紅い血」、「白い粉」に変わって、連体修飾語に移動できるし、「血が赤黒く滲んでいる」、「角は血に赤く染まった」、「頭がみるみる粉を白くふく」に位置移動しても文が成立できる。

- (14) さもなければ、手足に巻きつけた布に赤黒く血が滲んでいる。/ 訳：要不就是裹着手脚的布上，渗出红黑色的血迹来。（《黒い雨》）

→赤黒い血が滲んでいる (○)

→血が赤黒く滲んでいる (○)

- (15) 見れば角は紅く血に染った。/ 訳：一看，牛角上还沾着殷红的血。（《破戒》）

→角は紅い血に染まった (○)

→角は血に赤く染まった (○)



(16) 霧になって降る砂に、女の頭がみるみる白く粉をふく。 / 訳：雾状的落沙，眼看着在女人头上撒下了白粉。(《砂の女》)

→頭がみるみる白い粉をふく (○)

→頭がみるみる粉を白くふく (○)

(12)～(16)の用例においては、色彩範疇語の文機能は連体修飾語と述語動詞の補語の間に移動できることを明らかにした。つまり、

日本語の色彩範疇語： 連体修飾語と述語動詞の補語の間に位置移動できる

だが、日本語の色彩範疇語は連体修飾語から述語動詞の補語に変わると、表現効果が違ってくると思われる。

次に、連体修飾語と述語動詞の様態修飾語との間に移動できるかどうかについて検討してみる。

(17) 夕焼けで西の空が赤く輝いている。(作例)

→西の赤い空が輝いている (×)

(18) 夕陽が空をも海面をも赤く染めている。 / 訳：夕阳的余晕把天空和海面染得上下通红。(《あした来る人》)

→夕陽が赤い空をも赤い海面をも染めている (×)

(17)においては、「赤く」は述語動詞「輝いている」の様態修飾語であるが、「西の赤い空が輝いている」のように連体修飾語に変わることができない。(18)における「赤く」は、様態修飾語で、「夕陽が赤い空をも赤い海面をも染めている」のように連体修飾語に変わることができない。ここから見ると、次のようなことがいえるだろう。

日本語の色彩範疇語：連体修飾語と述語動詞の様態修飾語との間に位置移動できない

ちなみに、述語動詞の様態修飾語は述語動詞の補語と互いに移動できない。なぜかという、日本語の様態修飾語と補語が形態も同じであるし、文における位置も同じであるから、位置移動は問題にならないと思われる。

### 3.2 中国語の色彩範疇語の位置移動

中国語の色彩範疇語は、文の連体修飾語にも述語の様態修飾語にも述語の補語にもなる。中国語の文の語順は、一般的に連体修飾語は目的語か主語の前に、様態修飾語は述語の前に、補語は述語の後に位置する。連体修飾語は、様態修飾語と補語と位置移動できるかどうか、次の例文を用いて検討する。



- (19) 带着猫屎味的黄烟熏红了眼睛。她流泪了。/ 訳: 猫の糞のような悪臭を放つ黄色い煙にいぶされて目が赤くなり、涙が流れでる。(《活动变人形》)  
 →黄烟红熏红了眼睛 (×)  
 →黄烟熏了红的眼睛 (×)
- (20) 静珍喝下了最后一口酒, 脸涨得通红。/ 訳: 静珍は最後の一口をあおり、赤い顔で続ける。(《活动变人形》)  
 →脸通红地涨 (×)
- (21) 虽然这些气壮山河的农民革命斗争先后被镇压、被扼杀, 但这些农民英雄的鲜血, 已染红了中华大地。  
 / 訳: こうした気宇壮大な農民の革命闘な壮争は前後して鎮圧、扼殺されはしたものの、農民英雄たちの流した鮮血は中華の大地をすでに赤く染悲めていた。(《我的父亲邓小平》)  
 →鲜血已红染了中华大地 (×)  
 →鲜血已染了红的中华大地 (×)
- (22) 眼睛周围的皮肤由于发炎而红肿, 亮光光的仿佛一碰就能出水。/ 訳: 目のまわりの皮膚は炎症のため赤く腫れ、さわれば水が出そうなほどテラテラと光っている。(《轮椅上的梦》)  
 →皮肤由于发炎而肿红 (×)

(19)における“红”、(20)における“通红”、(21)における“红”は、それぞれ述語の補語であるが、いずれも様態修飾語にも連体修飾語にも移動できない。(22)における“红”は、様態修飾語であるが、それが補語に変わることができない。しかし、例外の用例がある。

- (23) 燕宁气得涨红了脸, 说: “谭静, 你这是污蔑无产阶级!” 燕寧は真っ赤になって怒った。  
 / 訳: 「譚静、あなたは無産階級を侮辱するのね!」(《轮椅上的梦》)  
 →燕宁气得红涨了脸 (○)
- (24) 巨大的幸福把道静吸摄在地上。她红涨着脸, 睁大眼睛一句话也不能说了。/ 訳: 大きな、とても大きな幸福が、道静を床の上に吸いつけてしまった。かの女は顔をまっかにし、目を大きく見ひらいたまま、口がきけなかった。(《青春之歌》)  
 →她涨红着脸 (○)

(23)における“红”は、補語であるが、様態修飾語に移動できる。(24)における“红”は様態修飾語であるが、補語に移動できる。これは、動詞“涨”が人間の顔色の変化を表し、色彩の意味特徴を具有するからである。しかし、これ以外の動詞は、色彩の意味特徴を具有していないので、様態修飾語と似合わせていない。したがって、中国語の色彩範疇語は、文において位置移動が行われない。これは、中国語が孤立語であるため、連体修飾語や様態修飾語、補語は、それぞれの位置がより固定されているので、文において位置移動できない。つまり、次のように示す。



## 中国語の色彩範疇語： 連体修飾語と様態修飾語、補語との間に位置移動できない

## 4. 色彩範疇語とアスペクトとの関係

この節では日中語の色彩範疇語とアスペクトとの関係について検討してみる。アスペクト的な意味は、動詞述語のみと関わっているのではなく、ほかの構文要素（例えば、格助詞、副詞的成分など）と関わっている。色彩範疇語は、副詞的成分として働く場合がある。この場合の色彩範疇語は、アスペクトの意味と関わっている。

- (25) まり子は薄みどりのブラウスに、黄いろいスカートをはいていた。朋輩に借りていたずらをしたのか、両手の親指の爪だけを赤く染めていた。/ 訳：她穿着一件宽大的薄罩衫和黄裙子，可能是借穿姐妹们的，有意上楼开我的玩笑。只是她大姆指甲倒是染得透红。（《金閣寺》）
- (26) 朝から霙が降っていた。受験生の子が寝不足の不機嫌な顔で街に出ていった。屋並のふちを白く染めて、霙は音を立てて降っていた。/ 訳：从早下起了雪雨。报考的孩子，抱着没睡足的难看脸色走上街去。雪雨有声有色地下着，把成排的屋檐染得银白。（《雪国》）
- (27) 夕陽が空をも海面をも赤く染めている。/ 訳：夕阳的余晕把天空和海面染得上下通红。（《あした来る人》）
- (28) 窓の外に立った商店街の街灯の光が部屋の中を月光のようにほんのりと白く照らして、その光に背を向けるような格好で彼女は眠っていた。緑の体はまるで凍りついたみたいにしじろぎひとつしなかった。/ 訳：窗外商店街上的路灯光，宛似一派月华，给房间镀上一层若明若暗的银辉。她以背光姿势睡着，身体仿佛冻僵一般一动不动。（《ノルウェイの森》）

(25)においては、「両手の親指の爪だけを赤く染めていた」は「染め終わった結果、両手の親指の爪は赤い爪になった」に言い換えることができる。この場合、「染めていた」のアスペクト的な意味は、「結果残存」になる。(26)においては、「屋並のふちを白く染めて」は、「染めた終わった結果、屋並のふちが白いふちになった」と言い換えられる。そこで、そのアスペクト的な意味は「結果残存」である。それに対して、(27)においては、「夕陽が空をも海面をも赤く染めている」は、「夕陽が染め終わった結果、赤い空や赤い海面になった」とは言い換えられない。つまり、「夕陽」があるときは「赤い空」や「赤い海面」に見えるが、「夕陽」が沈んだら、「赤い空」や「赤い海面」が無くなりえない。従って、「赤く」は様態修飾語として働いている。この文における「染めて」のアスペクト的な意味は「進行中」の意味になる。(28)における「街灯の光が部屋の中を月光のようにほんのりと白く照らして」は、「白く」は述語動詞「照らす」の様態を表し、「街灯の光が照らし終わったら、



部屋の中が白くなった」に言い換えられないので、「照らしていて」のアスペクト的な意味は「進行中」である。

(29) 山背洼里的阴影爬高了，夕阳把群山的峰顶都染红。 / 訳：山の畑の日陰が上方へ伸び、夕日が山々の頂を赤く染めた。《《插队的故事》》

(30) 脸上薄施脂粉，指甲也染得很红。 / 訳：うっすらと化粧して爪を赤く染めていた。《《关于女人》》

(29)では“夕阳把群山的峰顶都染红”の“红”は、述語動詞の補語であるが、(27)(28)と同様に、この文のアスペクト的な意味は「進行中」の意味である。それに対して、(30)においては、「爪を染めた結果は、赤い爪になった」と言い換えられる。この文における“红”は、述語の補語であり、この文のアスペクト的な意味は「結果残存」の意味になる。

(27)(28)(29)と(25)(26)(30)と比べると、前者の修飾関係においてはいずれも「+色彩変化」と「+光り」の意味特徴を具有しているので、そのアスペクト的な意味は「進行中」の意味であるのに対して、後者の修飾関係においてはいずれも「+色彩変化」の意味特徴を持っているが、「-光り」の意味特徴を持っているので、アスペクト的な意味が「進行中」の意味に成りえないのである。類型論的立場で言えば、次のようなことが言えるだろう。

日中語の色彩範疇語：「光り」と「色彩変化」の意味特徴を具有している修飾関係であれば、述語動詞のアスペクト的な意味は「進行中」の意味になりえるが、「色彩変化」の意味特徴のみ具有して「光り」の意味特徴を持たない修飾関係であれば、「進行中」の意味になりえない。

## 5. おわりに

本稿ではコーパスの用例調査によって、日中語の色彩範疇語の使用状態（品詞分布、文法機能の分布、修飾精密度）、色彩範疇語の位置移動、色彩範疇語とアスペクトとの関係といったことを考察し、言語類型論的な特徴を捉えてみた。本稿の考察した結果は次のようにまとめる。

色彩範疇語の使用状態：

- ① 日中語の色彩範疇語は、形容詞、名詞、動詞などに分布している。
- ② 日中語の色彩範疇語は言語における重役は、連体修飾機能を果たしている。
- ③ 現代中国語においては、“赤”より“红”のほうが使用頻度が低いが、現代日本語においては「赤」は「紅」より使用頻度が高い。
- ④ 中国語の色彩範疇語は名詞や形容詞から動詞化しつつあるのに対して、日本語の色彩範疇語は、元来動詞の形態素として動詞を形成させ、動詞用法として使われる。



- ⑤ 日中語の色彩範疇語の形容詞は主な文法機能は名詞を修飾することであるという点に共通している。
- ⑥ 日中語の色彩範疇語の形容詞用法は、述語として働くことが少ないという点に共通している。
- ⑦ 日中語の色彩範疇語の形容詞は、中国語の“赤”を除いていけば、いずれも動詞の様態修飾や動詞の補語になりえる。
- ⑧ 中国語の“紅”“白”色彩範疇語は、日本語より修飾の精密度が高い。

#### 色彩範疇語の位置移動：

- ① 日本語の色彩範疇語は、連体修飾語と述語動詞の補語の間に位置移動できるが、連体修飾語と述語動詞の様態修飾語との間に位置移動できない。
- ② 中国語の色彩範疇語は連体修飾語と様態修飾語、補語との間に位置移動できない。

#### 色彩範疇語とアスペクトとの関係：

日中語においては「光り」と「色彩変化」の意味特徴を具有している修飾関係であれば、述語動詞のアスペクト的な意味は「進行中」の意味になりえるが、「色彩変化」の意味特徴のみ具有して「光り」の意味特徴を持たない修飾関係であれば、「進行中」の意味になりえない。

本稿では、主に色彩範疇語が形容詞としての文法機能を考察したが、名詞、動詞としての文法機能はまだ考察されていない。また、色彩範疇語は、「赤」「白」語義に関するものだけを考察したが、ほかの色彩範疇語はまだ考察されていない。これらは、今後の課題としたい。

#### 注：

\* 本稿は中国国家社会科学基金項目“汉日语言情状范畴的类型学研究”（批准号：13XYY028）の研究成果である。

- 1) 本稿における「範疇」は、「カテゴリー」とほぼ同じ意味であるが、日中語の用語の習慣を配慮し用語の統一のため、「カテゴリー」を「範疇」とする。ちなみに、本稿では中国語の先行文献を原文のまま中国語簡体字で表記する。これらの先行文献は、ホームページ(<http://www.cnkinet>)で検索できる。
- 2) 日本語においては、色名の語彙か色彩語彙、色彩語と呼ばれているものが、いずれも名詞のことを指している。本稿における色彩範疇語は、名詞のほかに形容詞、動詞などを含んで色彩に関わる語彙の全てを指す。
- 3) 本稿では、「赤」「白」語義の語彙は、品詞も語形成も問わず、「赤」「白」語義を含んで色彩を表す語彙を指す。例えば、日本語「薄赤い顔をした・赤黒い痣になっていた・顔も真っ赤・赤や青の一面の灯の海である・赤インクで枠を入れてなかった・赤熱した鉄・赤々と燃上った」における下線した「形容詞・形容動詞・名詞・名詞語素・動詞語素・副詞」であるものは、いずれも「赤」語義の用例であると見られ、中国語「血紅的的太阳里蠕动・尽消失了艳紅的颜色・脸特紅・脸涨得通紅・穿了一身紅条絨・镶着一圈浅淡的紅・小女子紅了臉」における「形容詞・名詞・動詞」は、「赤」語義の用例であると見られている。



- 4) 当然、コーパスにおける色彩範疇語は、「あか」、「こう」、「しろ」などの仮名文字で表記するものもあるが、手間のため、本稿ではこのようなものを考察しないことにする。
- 5) 本稿では、( )の中のものは、語の意味や用法の説明を表し、「/」の後のものは、コーパスの訳文を表し、ただしこの場合、出典をつけないことにする。

## 参考文献：

- [1] 中日颜色词语及其文化象征意义. 外语教学与研究出版社, 2002.
- [2] 李庆祥. 日语颜色词的语义特征分析. 日语学习与研究, 2003(4): 32-35.
- [3] 董冰. 汉日颜色词的文化视角研究. 信阳师范学院学报(哲学社会科学版), 2005(4): 81-84.
- [4] 林凤英. 汉、日颜色词的象征意义与语用意义的异同. 广东外语外贸大学学报, 2008(3): 34-37.
- [5] 陆娟. 日中颜色隐喻认知比较. 南京农业大学硕士学位论文, 2009.
- [6] 魏丽华. 中日文化中的色彩语的隐喻意义. 日语教学与研究, 2003(4): 36-38.
- [7] 小野 文路, 堀内 隆彦, 富永 昌治. 現代日本人を対象とした色彩語彙の調査と分析. 日本色彩学会誌, 2010(1): 2-13.
- [8] 木原茂. 私的色彩語観. 日本語学」特集テーマ別ファイル (2)意味Ⅱ, 1988(1): 226-229.
- [9] 久島 茂. 第三章 明度・色彩形容詞の体系. 《物》と《場所》の対立—知覚語彙の意味体系一, 2001: 91-114.
- [10] 杉浦 明平. 若葉の色. ことばと教育. 三省堂, 1976.
- [11] 蘇 紅. 色彩語の日中対照研究—赤・黄・黒・白の四色を例として対照する場合—. 日中語彙研究, 2014(3): 47-62.
- [12] 富永 昌治. 現代色彩語彙の調査と分析. 日本色彩学会誌, 1991(15): 119-126.
- [13] 彭 国躍. 「中国語の色彩語彙とメタファー」に関するデータ整理: 神奈川大学共同奨励研究の中間報告(活動報告). Bulletin of the Institute of Humanities, 2008(41): 176-178.
- [14] 矢野 光治. 現代漢語における色彩語彙の表象. 立正大学文学部研究紀要, 2002(18): 55-1.

## 中文要旨：

## 日汉语言色彩范畴语的语法功能的类型学考察

## ——以“红”“白”语义的词汇为例——

西南大学 彭 玉全

**摘要：**本文以日汉语色彩范畴语为研究对象，以表示“红”“白”语义的词汇为例，从色彩范畴语的使用现状（即词性分布、语法功能分布、修饰精密度）、色彩范畴语句中位置移动、色彩范畴语与体貌意义的关系等方面考察了色彩范畴语语法功能的语言类型学特征。

**关键词：**色彩范畴语 语法功能 语言类型学 “红”“白”语义 日汉语



白帝社 〒171-0014 東京都豊島区池袋2-65-1 ☎(03)3986-3271 Printed in Japan 定価(本体2000円+税)



CS 扫描全能王

3亿人都在用的扫描App